

【研究ノート】

時代別展示からみる東京国立博物館の課題

The problem of Tokyo national museum seen from Chronological exhibitions

下湯 直樹*

Naoki SHIMOYU

はじめに

2001 (平成13) 年4月1日より東京国立博物館は京都国立博物館、奈良国立博物館とともに文化庁を所管とする独立行政法人国立博物館となった。2007年には独立行政法人文化財研究所との組織統合がなされ、独立行政法人国立文化財機構の一施設に位置付けられることとなった。この独立行政法人化の意義は現場組織の改善を促し、国が提供していた行政サービスを個々の博物館に委ね、行政サービスの効率性、有効性の向上を図るためのものであった。この独立行政法人化により東京国立博物館においても組織の変革が迫られ、国立博物館時代の専門的な室管理体制から課ごとの分業体制が敷かれることとなり、職員の連携が図られ、対外サービスの煩雑さなどの改善がみられた。⁽¹⁾ 同時に展示部門の改善も図られ、2004年の本館のリニューアルに伴い、時代別展示という手法が常設展示に採り入れられた。従来の“名品 (優品) をみせる”美術展示から“名品 (優品) から情報を伝える”歴史的な展示の手法へと変わりつつある。

また一方で、独立行政法人化によって個々の博物館に経営能力が求められ、集客確保として頻繁な特別展の開催を強いられることとなった。その実施に当たっては、実質のスポンサーとなるメディアが主導し、興行化の一途を辿っている。このような東京国立博物館の動きは、直ぐさま地方の博物館にも波及し、自主企画の特別展が減少し、メディア主導の特別展が多くみられるようになった。このことに対して、東京国立博物館学芸企画部企画課課長の井上洋一は「肥大化した特別展の数の削減や規模の縮小化を図るとともに経費のあり方を真剣に考えるべきではないか。その上で充実した企画と作品の質に拘った特別展を計画すべきではないだろうか」⁽²⁾ と興行化する特別展のあり方に対して自戒の念を込めて述べている。

東京国立博物館はいうまでもなく博物館事業を明治時代からリードする我が国の博物館を代表する博物館である。たとえ独立行政法人化されたといえども「国」と冠する博物館である以上、先の特別展のケースの如く地方の博物館に及ぼす影響力たるは甚大である。そこで本稿では、我

* 小学館集英社プロダクション

原稿受理日：平成22年10月20日

が国の博物館事情が自然と映し出される東京国立博物館の展示、特に先のリニューアルに伴い採り入れられた時代別展示という展示手法に着目し、その歴史的な変遷から抽出される地方博物館への余波や館の名称等の課題について考察していきたい。

1. 時代別展示の研究

(1) 時代別展示とは

今日の博物館において資料の持つ学術情報を引き出す上で、時代別に分類及び展示することは常套的な手法であることは言うまでもない。しかし、伊藤寿朗が「展示法その他の個別的方法の発達があったとしても、それを必然化し、現実化した契機が常に不明である」⁽³⁾と指摘しているように、今日ある展示手法のほとんどが、断片的な成立背景は語られることはあっても出現するまでの過程やはっきりとした契機とその後の変遷といった展示学史に則った研究は未だなされていないのが現状である。同様に当展示手法もどのような過程を経て、現在の博物館に定着したのかについては実ははっきりとわかっていないのである。

そもそも時代別展示とは、発達史展示、通史展示、系統展示といった時間軸展示の一種である。

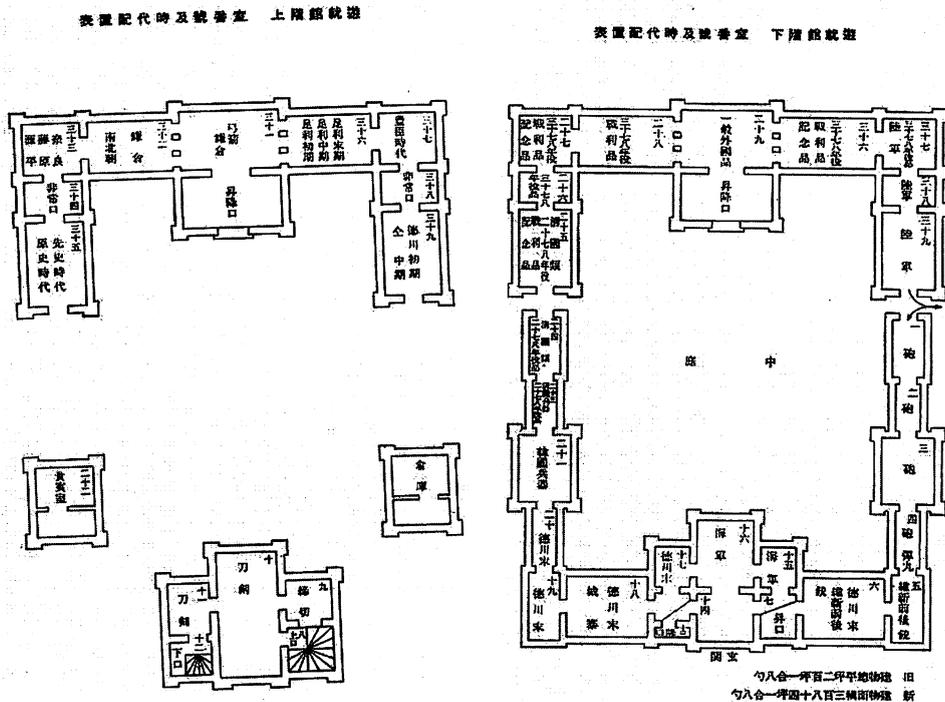


図1 1908年頃 遊就館 展示品配置図

『靖国神社百年史 資料編 中』 pp.66～67 より転載

また、同一種の資料のみで展示空間を構成するのではなく、いくつかの室、いくつかの展示コーナーをまたぎながら、種々の資料を有機的に組み合わせ構成された総合的な展示手法である。

(2) 時代別展示の先行研究

時代別展示に関する研究は、我が国で初めて実践したとされる森林太郎（鷗外）研究に拠る所が大きく、『博物館学事典』⁽⁴⁾にも森の東京帝室博物館総長時代の特記すべき仕事の一つとして「時代別陳列法」の採用と明記されている。そして、椎名仙卓は、『大正博物館秘話』⁽⁵⁾の中でこれまで着目されてこなかった森の博物館人としての面に焦点を当て、帝室博物館総長時代の勤務姿勢や功績など詳述し、その中で時代別展示についても触れている。また、昨今では「森鷗外と美術」といったような展覧会⁽⁶⁾が実施されるようになり、森の美術に対する造詣の深さも注目されるようになってきている。その展覧会の図録には、森と美術画家、博物館との関わりに関する示唆に富んだ論文が何本も掲載されている。特に村上敬は「鷗外とミュージアム 遊就館整理事業をめぐって」⁽⁷⁾のなかで森が遊就館整理委員長に就任した際に展示の改革を進め、1909（明治42）年2月の段階で「遊就館業務経営ニ関スル意見」⁽⁸⁾として時代別展示の採用を東京帝室博物館に先駆けて提言していたことを指摘している。実際に遊就館の『靖国神社百年史』⁽⁹⁾をみていくと、1909年、遊就館整理委員長となった森林太郎は遊就館のちょうど拡張期に「遊就館業務経営ニ関スル意見」⁽¹⁰⁾として以下の如く述べている。

今回遊就館ノ拡張シタルハ、靖国神社ノ什物及戦利武器等ヲ陳列スルノ外、広ク歴史上参考トナルヘキ武器類ヲ蒐集シ、之ヲ年代ニ區別陳列シ、教育上ノ資料ニ供セントスル外ナラス。而シテ、此目的ヲ達スル為ニハ、華族・富豪等ニ右拡張ノ趣旨ヲ告知シ、所蔵武器類ノ出品ヲ勧誘スルト同時ニ、出品ノ手続ヲ定メテ、出品者ノ便宜ヲ計リ、且、出品ニ対スル保管ノ責任ヲ明ニスルノ必要アリトス。

この結果として、翌年の4月に出された「遊就館拡張趣旨書」⁽¹¹⁾では筆者不明であるものの「今回遊就館ノ拡張ヲ期トシ、軍事上参考トナルヘキ武器類ヲ蒐集シ、其ノ種類ト年代トニ依リ整理陳列シ、以テ帝国ニ於ケル武器ノ変遷ヲ明カニシ、戦利品ト相俟ツテ、国民ノ軍事知識ヲ増進シ、益々尚武ノ念ヲ涵養セントス。」と森の意見が採用され、時代別展示が誕生している。（図1）

上記の先行研究により、時代別展示は遊就館において実施され、東京帝室博物館に応用されたという一つの変遷を把握することが出来た。次章では時代別展示が誕生するまでの前後関係の確認と実践の舞台となった東京国立博物館の展示関連資料を中心に精査し述べていく。

2. 東京国立博物館の展示史

(1) 前史

帝国博物館以前の研究に関しては佐々木時雄の『動物園の歴史』⁽¹²⁾や関秀夫の『博物館の誕生ー町田久成と東京帝室博物館ー』⁽¹³⁾に詳しく論及は避けるが、博物館にとって所管が文部省から博覧会事務局、内務省、農商務省、宮内省と転々とし、田中芳男の総合博物館構想や町田久成の集古館構想など各々の思惑が交錯するなど、多分に政治性を孕んだ時期であった。また、帝国博物

館以前の展示はというと、「天造人工ノ諸物品ヲ網羅蒐集之ヲ陳列シテ縦観セシメ古今ノ沿革ヲ徴考シ将来ヲ勸奨スヘキ一切ノ事ヲ調理ス」⁽¹⁴⁾ という内務省時代の事務分掌の内容の通り、文部省から天産資料を引き受けたことにより、自然系、人文系資料の両方を扱う、一種の「総合展示」を実施していた。また、上野に移る前の内山下町博物館陳列館の展示は表1の如くであり、町田久成によって示された提言をもとに作成された「博物館博物園常備品略区別」⁽¹⁵⁾ が反映されたものとなっている。当分類は植物や鉱物を含めた天造物と古器旧物が「祭器ノ部」以下三十一部に分類されているなど、東京国立博物館における資料分類の基礎となり、当分類なくして時代別展示の誕生はなかった。

(2) 帝国博物館時代

さて、1889年に九鬼隆一を総長として帝国博物館が誕生することとなる。それには従来の東京の帝国博物館とともに、京都には帝国京都博物館が、奈良には帝国奈良博物館が設置されること

第十一号列品館	第十号列品館	天産部附属館	第九号列品館	第八号列品館	第七号列品館	第六号列品館	第五号列品館	第四号列品館	第三号列品館	第二号列品館	第一号列品館
天産部 動物類	天産部 動物類	動物骨髄陳列所	工芸機械部之三	芸術部、 英国博物館寄贈品	工芸機械部之一	工芸機械部之一	天産部之三 鉱物類	農業山林部	天産部之二 植物類	天産部之一 動物類	陸海軍部、 芸術部、 史伝部、教育部、 法教部、
第八号館	第七号館	天産部附属館	第六号館	(上野ニ移転の為 メ十一年七月取毀ス)	第五号館	第四号館	第三号館	第二号館	(〃)	(上野ニ移転の為 メ十一年七月取毀ス)	第一号館

表1 内山下博物館の展示構成 『東京国立博物館百年史』 p181 より転載

となった。それに伴い、官制細則の分掌服務の中で「帝国博物館帝国京都博物館ノ事務ヲ分ツテ歴史部美術部美術工芸部工芸部ノ四部トシ帝国奈良博物館ノ事務ヲ分ツテ歴史部美術部美術工芸部ノ三部トナシ理事ヲ以テ部長ニ充テ技手ヲ以テ部員に充ツ」⁽¹⁶⁾と定められ、帝国博物館として天産に関しては保存開示するのみに留まり、歴史、美術に比重を置くことが決定された。また、上記の如く理事や技手を置き、さらには省達第七号によって複数の評議員、学芸委員を置くことも定められている。これは総長以下の理事や評議員、学芸委員などは例外を除いて専任というわけではなく、他官から優秀な人材を兼任させるといった組織作りであった。

その理事の一人に抜擢されたのが東京美術学校幹事の岡倉天心（覚三）である。岡倉は、九鬼の図書頭時代からの仲であり、共に当時、後の古社寺保存法の制定に繋がる全国的な文化財調査、保護活動を実施していた。この活動は、宮内省に設けられた全国宝物取調局の調査に続くものであり、古社寺宝物を中心とした、その数21万点以上に及ぶ資料の調査で、多量な資料の学術情報の蓄積に繋がったものである。この知見の蓄積により生み出されたのが岡倉の『日本美術史』⁽¹⁷⁾である。

そもそも時代別展示が誕生する前提として、資料を材質や様式等により年代的に分類する時代区分が必要となることはいうまでもなく、岡倉の美術史の時代区分なくして時代別展示は成立しなかった。その時代区分の書かれた『日本美術史』であるが、本として出版刊行されたものではなく、岡倉が東京美術学校校長の時に日本美術史の講義の内容を聴講していた学生が筆記し、纏められたものである。その『日本美術史』によると、岡倉は「推古、天智、天平、藤原、平家、鎌倉、足利、太閤、徳川、明治」に分けており、1991年発行の辻惟雄監修の『日本美術史』⁽¹⁸⁾で分類するような「先史・古墳時代、飛鳥・奈良Ⅰ（白鳳）時代、奈良Ⅱ（白鳳天平）時代、平安時代Ⅰ（前期）、平安時代Ⅱ（後期）、鎌倉・南北朝時代、桃山・江戸Ⅰ（江戸初期）時代、江戸Ⅱ（江戸中・後期）時代、近代、現代」とまで細分化していないものの、当時としては画期的な区分であった。また、博物館としても同知見の集積から同時期に日本美術史の編纂にとりかかっており⁽¹⁹⁾、列品の整理と表裏一体に進められていた。また、岡倉は「陳列の目的は、(1)時世を示し、(2)名家大家を示し(3)流派を示し、(4)全体の関係を示すの四目にて、陳列場を四区に分ち一区一目として後進を奨導するは必須の目的なり」⁽²⁰⁾と時代別展示へと繋がる具体的な展示の構想も示していた。この構想とは別に、「京都の博物館と他の博物館との関係如何に就ては、京都は所謂京都博物館たるべき事にして、奈良なり東京なりへ連絡を通じ日本の博物館をなすべし。即ち奈良にて天平以後弘法以前の博物館とし、日本の最古物を集め以て羅馬に比すべく、東京にては徳川美術の粹を集め亜細亜の物品を蒐集し以て英京倫敦を模し、京都は金剛以後応挙に至るの時代を集めて以て仏京巴里に擬して三館鼎峙、日本の美術を海外に輝やかしたきは予が尤も熱望する処なり」⁽²¹⁾と考えており、「東京の東洋美術品蒐集を例外とすれば、日本美術を時系列に縦割し、時代別の分業蒐集と展示をもくろむ」⁽²²⁾という構想も持っていた。

実際の展示も、1889年から1890年頃の展示（図2）と1899年の展示（図3）とを比較すると、その間に部ごとの分けから、種別の分けに変化し、列品の細分化がなされている。しかし、

注目すべきは未だ上古以前の展示がなされていない点である。この点について少し触れておきたい。

考古遺物は、現在の美術史の中では、「先史・古墳時代、飛鳥・奈良Ⅰ（白鳳）時代、奈良Ⅱ（白鳳天平）時代、平安時代Ⅰ（前期）、平安時代Ⅱ（後期）、鎌倉・南北朝時代、桃山・江戸Ⅰ（江戸初期）時代、江戸Ⅱ（江戸中・後期）時代、近代、現代」⁽²³⁾と明確に美術史の変遷の中で捉えられている。しかし、我が国で縄文、弥生時代を代表するような考古遺物が美術史の中で捉えるようになったのは実は戦後以降のことである。周知の通り、縄文土器が縄文研究者の小林達雄や美術家の岡本太郎等によって調査研究、普及活動により急速に美術的なものとして世間に広まったことなどその一例に挙げられるであろう。

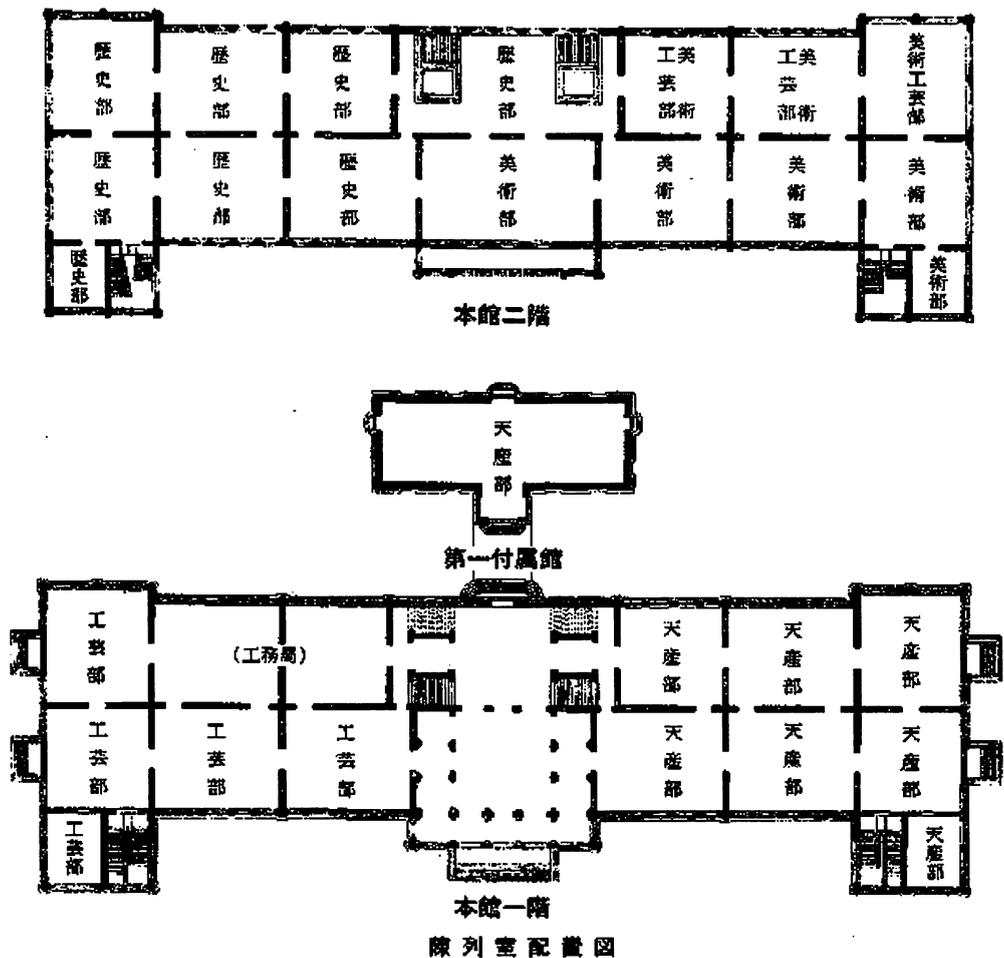


図2 1889～1890年頃 帝国博物館 本館
『東京国立博物館百年史』p266 転載

そもそも、我が国で初めに日本美術史を体系的に纏めたのは先の岡倉天心『日本美術史』であるが、その岡倉の美術史の時代区分には上古以前のもは一切含まれていないのである。これは、当時まだ考古学が独立した学問と成り得ておらず、文化人類学の範疇に含まれていた時期でもあったことに起因している。例えば当時、文化人類学、考古学界を引っ張っていた坪井正五郎でさえも、日本人の起源としてコロボックル説を唱えていたことから理解できよう。また岡倉自身も、日本人の起源は「天ツ国より降臨せる天孫氏」⁽²⁴⁾ であると考えており、基本的に「日本美術史は最初より述ぶべきなれども、茲に推古以来を以て日本美術史となしたり。其の故は推古以前の美術は寧ろ古物の性質を帯ぶるものにして、稀に美術と称するに足りるものあるも、その伝来詳かならず。美術として系統を立てて述ぶべき程のものあるなし」⁽²⁵⁾ というスタンスに立っていたからに他ならない。

上記の如く思想に反映された帝国博物館の考古展示であったため同時期には種々外部からの批判を受けていた。⁽²⁶⁾ その批判者の一人に若き人類学者、鳥居龍蔵がいた。批判を行った年である1893年はちょうど先の坪井正五郎を頼って上京し⁽²⁷⁾、人類学教室に入ることを許された頃で

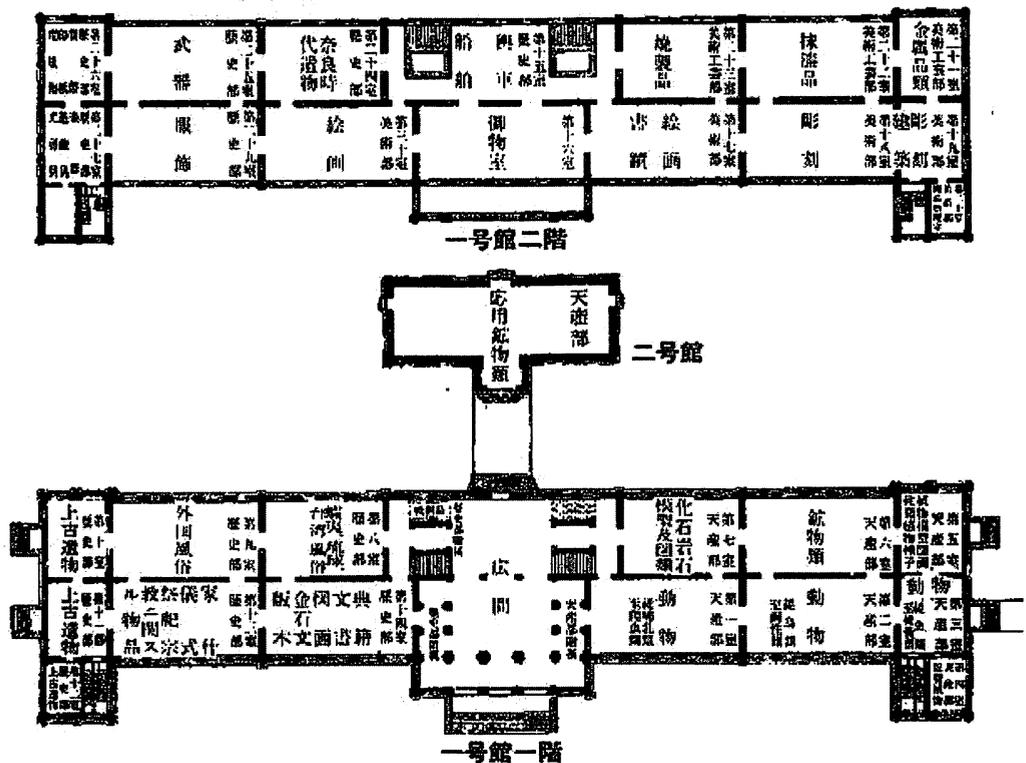


図3 1899年頃 帝国博物館 本館
『東京国立博物館百年史』p279

ある。当意見は博物館学史上の初見であると思われるため少し長くなるが、下記に引用することとしたい。⁽²⁸⁾

今帝国の名称ある。我国家の光輝たる博物館の陳列乱雑無法。(中略) 聞く我帝国博物館は専門学者星辰羅列すと。何ぞこれを知らざるの理あらんや。(中略) 石器、石器、等しく是れ石器なり。然れども今日の科学は石斧と曲玉と同一の物と認めざるなり。矢の根石と管玉と同一の物と信せざるなり。石斧矢の根石ハ石器時代 Stone age のものなり曲玉管玉は金器時代 Metal age のものなり。是等ハ人類学者を待たずして高等小学の生徒尚よく解するを得ん。然るに堂々たる、否な学者の集ませ給ふ帝国博物館にして、更に充分これを区別することなく不親切にも等しくただ石器として陳列せらるる余其何たるかを少しも解する能はざるなり。若し有様みて無法乱雑の陳列正さざれい。博物館ハただ古物、骨董店陳列の恰かも大なるものにして。これに従事せられ給ふ学者諸君ハ或ハ強て云ハバ宝の番人ならんか。(中略) 一日もはやく其陳列法を改正せられて以て内外人をして我帝国博物館の帝国博物館たることを広く知らしめよ、ああ是れ何そ余一人の希望ならんや。

と、上記の文から分かるように、帝国博物館での考古展示はあくまでも材質別に区別されているだけの乱雑なものであることを厳しく指摘している。しかし、1899年頃の帝国博物館の配置図の如く改善された様子はみえず、考古分野での展示の改革は考古学の学問的な成熟とこの後、帝室博物館の鑑査官となる後藤守一の登場を待たねばならなかった。

3. 帝室博物館時代

1900年(明治33)7月1日に帝国博物館は、官制が改まり帝室博物館と名称を変更し、総長も九鬼から股野琢へと替わった。帝室博物館処務規定では、先に紹介した鳥居龍蔵の指摘を受けてか、各部の掌務の冒頭に「列品ノ分類秩序ヲ正シク」と示し⁽²⁹⁾、列品区分が改められ、歴史部では従来の「発掘品」は「上古遺物」となり、「奈良時代の遺物」が加えられるなど時代別展示の先駆けが登場するようになった。しかし、帝室博物館は当時、天産資料も多数抱えており、一種の「総合博物館」の体を成していた。これに対し、先の鳥居とはまた違う立場で批判した人物に、後に復興翼賛会の筆頭の一人となった歴史学者、黒板勝美がいた。黒板はその批判のなかで「我が國未曾有の大戦として、日本人の精華を發揮せる此日露戦争の好記念として、歴史の根本材料となれる古文書の保存を永久に計つてもらいひたいのみならず、博物館の如き多少雑駁の傾あるものを集めて、一般學術界の爲めに計るよりも寧ろ學術界の趨勢に伴つて、専門的傾向を有するものゝ完成を期すべきものと考えられます」⁽³⁰⁾と述べている。これは天産資料を多く抱えた帝室博物館を「雑駁」なものとして捉え、それよりも歴史学を研究するに都合の良い文書館の必要性を説いたのであった。

(1) 京都帝室博物館における時代別展示

このように多くの問題を抱えながらも帝室博物館で時代別展示は産声を上げたのである。これまで時代別展示は森林太郎に絡めた学史のなかでしか触れられることがなかったが、実際にはそ

の前後の文脈も存在する。その一つとして、1903年に大阪で第五回内国勸業博覧会が実施され、これに京都帝室博物館が協賛して実施した「平安奠都以降時代品展示」⁽³¹⁾がある。この展覧会は、百数十幅の書跡と絵画等を組み合わせ「歴史的な総合展」として開催したものであり、京都帝室博物館では、東京に先駆けて先進的な取り組みを実施していた。その後、1915（大正4）年になると久保田鼎が京都帝室博物館の館長となった。久保田は先の岡倉天心の下で働き、その影響を強く受けた人物であった。その久保田であったため、彼の意向が強く働き、列品の時代区分が「推古、白鳳、天平、貞観、藤原時代前期、後期、鎌倉、足利、桃山、徳川」⁽³²⁾時代と変更された。そして、1915年秋、館内全室を使用して大典記念特別展を実施する機会に際し、常設展示を撤去し、従来からの分野別展示から時代別展示に改め、展示品の性質、時代に応じて各室に分配したのである。（図4）

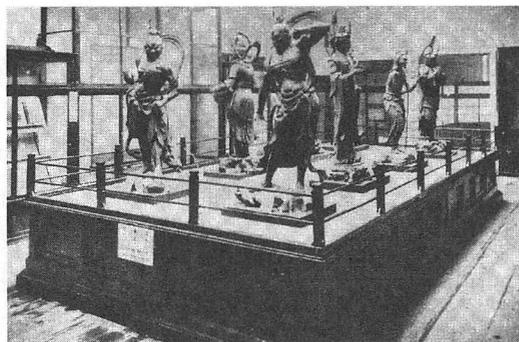


図4 京都帝室博物館の時代別展示（鎌倉時代）

『京都国立博物館百年史』p151より転載

しかし、その先進的な取り組みは長くは続かず、1924年に京都帝室博物館が京都市に下賜され、時代別展示から分野別展示に戻された。これについて『京都国立博物館百年史』の中で「時代別陳列品では、陳列品の構成が変わるたびに陳列装置の調整が必要になるのに対し、設備（陳列ケース等）に融通性を欠いていたこと、また陳列の上で様式の特徴をきちんとあらわそうとすると、各部の担当者の協同作業による綿密な計画が求められるが、その体制が充分でなかったことなど、陳列替の周期が短かった当時では、かなり困難があった」⁽³³⁾というように見方がなされている。

（2）森林太郎と東京帝室博物館

一方、先に触れたように森林太郎は東京帝室博物館に先行し、1909年に遊就館整理委員長となり、遊就館の拡張期に「遊就館業務経営ニ関スル意見」を述べ、その意見が遊就館で採用され時代別展示を実施している。

そして満を持して1917年12月25日に森は帝室博物館総長に着任することとなる。その就任当初には、高島米峯の「新任博物館総長森林太郎博士に與へて博物館の革新を促す」⁽³⁴⁾といった役人経営が色濃く残る博物館への革新を迫る意見が寄せられるなど物議が醸し出されていた。しかし、その世間の森林太郎に対する見方に反して、勤勉に総長を務め、数々の成果を残している。その筆頭は、従来の「品目別分類陳列」を改め、新たに資料を「上古・飛鳥・奈良・平安・鎌倉・足利・豊臣・徳川・明治」に区分し、「時代別陳列」を実施するに至ったことである。（図5）その他にも総長自らが率先して動き、博物館蔵書の解題および略伝を執り、『帝室博物館学報』の創刊や正倉院宝物の調査、一般人への観覧に門戸を開くなどの事業を成し遂げていった。

何故、軍医や文豪として名高い森にこのような博物館事業における成果が残せたのだろうか。少し回り道するがその淵源に触れておきたい。森は1888年9月、鴎外は西洋の諸芸術について知識を携え、留学先のドイツから日本に戻った。⁽³⁵⁾ その森に目を付け、東京美術学校の嘱託教員として招いたのが、当時校長であった岡倉天心である。受け持った科目は美術解剖学で、造形物を解体、解析し、研究する学問であった。一時、日清戦争のため日本を離れていたため、講義は中断していたが帰国から半年後の1896年3月に復職し、今度は今まで岡倉が受け持っていた美学及美術史を受け持つこととなった。ここまでの流れを一見すると、先の『日本美術史』を基に講義をし、その岡倉の流れを汲んでいたとみえる。しかし、話はそう単純ではなく、森はあくまでも西洋美術がベースであり、その美術史とは西洋美術史を指していた。とはいえ、美術史と名の付く講義である以上、地域は異なれども、時間軸を基本とした系統だった美術の講義であったことは容易に予想できる。また森は本業である軍医としてのキャリアを積み重ねながらも、『審美新説』⁽³⁶⁾

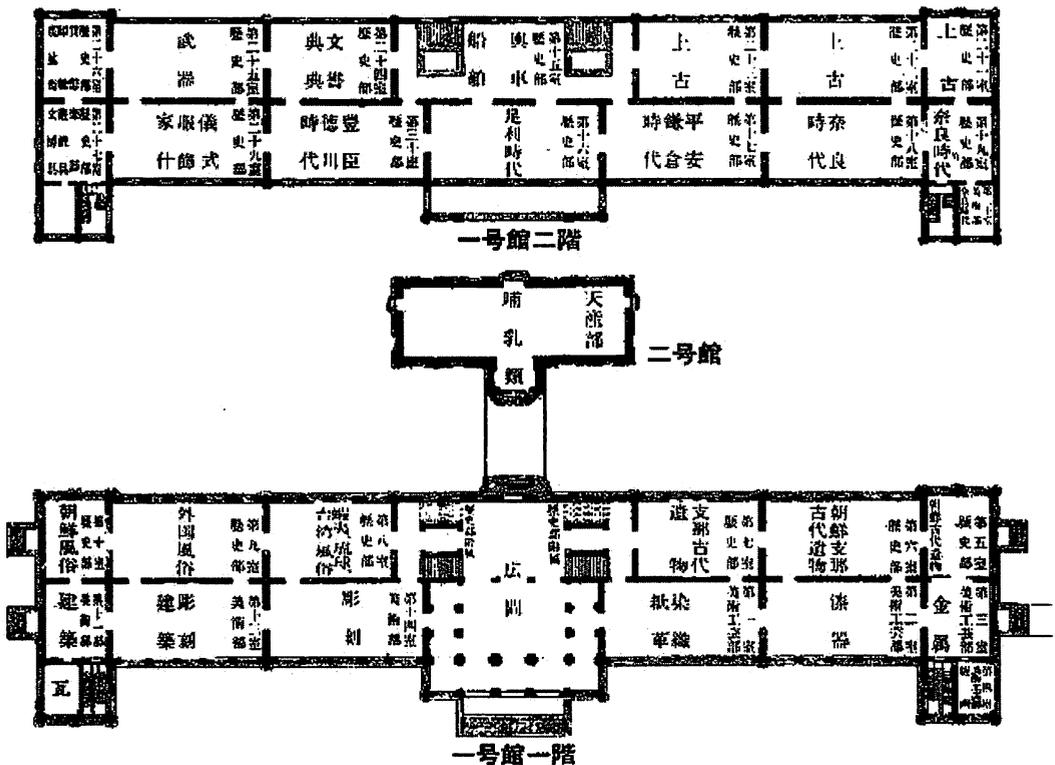


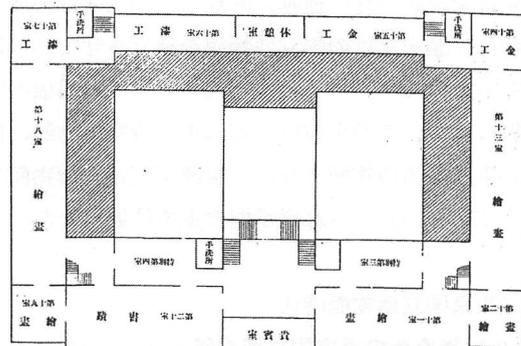
図5 1918年頃 帝室博物館 本館
『東京国立博物館百年史』p345より転載

や『藝用解剖学』⁽³⁷⁾などの美術、美学に関する翻訳、著作を次々に出し、1907年に開設された文展では審査委員をつとめ、さらに1919年に開設された帝国美術院では委員長に就任した。つまり、先述した博物館での業績は、上記のような十分過ぎるほどの多分に美術と関わりを持ち、その素地があったればこそその博物館での実践とその成果だったのである。

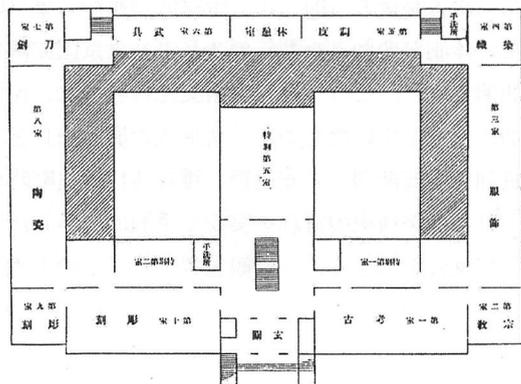
さて、話を時代別展示に戻すが、その森が東京帝室博物館で時代別展示を実施するにあたり、苦心したのは、予算の獲得と天産資料の扱いだったようである。そのことは、陸軍軍医で無二の親友であった賀古鶴所との手紙のやりとりのなかで伺え、「博物館繰越金一萬五千圓ヲ陳列替ニ使用之件追加予算トシテ提出イタシ」⁽³⁸⁾と述べ、次年度の繰越金の追加予算を算段している。これに対し、提出を受けた上官も、時代別展示を実施するにあたって天産資料があつては無理であろうと踏み、即時に森の意見を受け容れはしなかったようである。⁽³⁹⁾これに対して森は、天産資料の問題と時代別展示に必要な展示替えの問題とを切り離し、上官を説得した。そして苦勞しながらも予算を獲得した森は早速実行に移し、従来の「品目別分類陳列」を改め、新たに資料を「上古・飛鳥・奈良・平安・鎌倉・足利・豊臣・徳川・明治」に区分し、1918年8月16日に「時代別陳列」を実施するに至ったのである。

(3) 震災以後の東京帝室博物館

しかし、周知の通り東京帝室博物館は、1923(昭和3)年9月に関東大震災に見舞われ、発展的にあつた博物館事業や、森が苦勞して作り上げた時代別展示は脆くも崩れ去ってしまった。長年、東京帝室博物館にとって目の上の瘤であつた天産資料を、展示品の殆どを焼失した東京博物館や、教授用博物標本として受け入れの希望のあつた学習院などに譲渡することが出来たのは、不幸中の幸いであつたといえよう。関東大震災以後、東京帝室博物館の業務は、歴史美術博物館としての業務に集約し、損壊を免れた表慶館を唯一の展示館として活動を再開することとなった。再開当初の展示点数は1,192点であり、手狭な展示館にできるだけ多数の名品を展示していた如く、この美術館特有の提示型展示は東京国立博物館の常設展示において昨今まで続いた典型的なスタイルとなった。ただ、歴史部に開



(上階) 圖配室列陳館本



(下階) 圖配室列陳館本

図6 復興帝室博物館 本館

『東京帝室博物館 復興開館陳列案内』p7より転載

しては、先述した帝室博物館鑑査官、後藤守一の登場により配当された三室のみのなかで美術部とは一線を画した理念で展示を実施していた。そもそも後藤は、1927年から官命により約二年間欧米を巡歴した経験を持ち⁽⁴⁰⁾、専門は考古学でありながらも博物館に対する卓見を持ち合わせていた人物であったといえよう。その後藤が与えられた三室に実施したのは次の三つの展示法であり、「第一は一時代の文化を現はすということを目的にするものであり、第二は全時代を縦断的にとり、部門的に文化現象を一々解説することであり、第三はある特定した遺物について、その年代の変遷とか、地方的区別とかいふものを示し、以てその遺物を通じて見た文化の変遷または地方色を現はす」⁽⁴¹⁾ というものであった。つまりは、「常に感覚に訴へる」美術展示とは異なり、「知覚の働きを俟つ」歴史展示ともいうべき方法を採用したのである。これは皮肉にも展示面積の減少により時代順に系統的な流れでもって室を分け展示する時代別展示の実施が難しくなったことへの対応策が逆に功を奏し、後藤守一をして我が国の歴史展示の幕開けとなったといえるのである。

その後、関東大震災によって主要な建物を失った東京帝室博物館であったが、先の黒板勝美が帝室博物館復興翼賛会の中でアカデミズムの中心となり主導し、「一大東洋古美術博物館」として1938年に復興開館した。(図6) この黒板の運動について金子淳は「その運動では、帝室博物館の歴史部を廃止させる運動に関与していたのは矛盾するようですが、じつは、上野の帝室博物館とは別に、歴史だけの国立博物館を独立させて、別につくろうと考えていたようです。それが国史館だったのです」⁽⁴²⁾ と指摘している。この黒板の国史館計画自体は自身が倒れたことにより勢いを失ったが、この余波は確実に東京帝室博物館には残った。つまり後藤守一の目指した歴史展示は、東洋美術博物館となった復興東京帝室博物館では採用されず、考古展示も「本館の他の陳列とそぐわない」とされ提示型の美術的展示となった。

4. 東京国立博物館時代

(1) 戦後直後の東京国立博物館

第二次大戦後の1947年、帝室博物館から東京国立博物館へ変わり、体制が一新することとなった。体制が変わった翌年の3月より東京国立博物館は新しい試みとして「日本美術史総合展」が開催された。この「日本美術史総合展」は、復興博物館以降、考古、絵画、彫刻、工芸等の種目別に展示していたものを「新形式の展示法」として展示室を時代別に、上古時代、飛鳥時代、奈良朝、平安前期、平安後期、鎌倉時代、室町時代、桃山時代、江戸時代というような区分に分け、日本の美術史の流れを実物で系統的に示したものであった。この総合展は従来なかったものとして反響が大きく、一般観覧者から以下のような感想があった。⁽⁴³⁾

つた方がいい」、もっと説示型の展示を望むというような種々意見が出されている。また、一時は「館の半分を総合的時代展示とし半分を専門的テーマ展示とする構想」⁽⁴⁵⁾もあったようである。しかし、先の話し合いも構想も空しく、部門（名品）展示をよしとする旧来の考えが強く、短期間における特別展でのみ実施されることとなった。（図7）

（2）独立行政法人化以後の東京国立博物館

周知の通り、東京国立博物館は中央省庁再編に伴う独立行政法人制度が発足した2001年には、独立行政法人国立博物館の管轄下に移り、2007年に独立行政法人国立文化財機構の施設となった。それに伴い、国立博物館時代の専門的な室管理体制から課ごとの分業体制が敷かれることとなり、また2004年には本館のリニューアルもなされた。このリニューアルによって採り入れられた展示手法が時代別展示であった。（図8）森林太郎が帝室博物館で実施してから実に半世紀以上が優に経った後のことである。そこで、この時代別展示を計画した展示デザイナーの木下史青は以下の如く述べている。⁽⁴⁶⁾

展示体系を一新し、分野別の展示は1階に集め、2階を「日本美術の流れ」として、時代別に見せる展示体系を取り入れました。分野別の展示は、じっくり見たい人や専門家には有意義です。しかし、外国の方や一般の方にとっては専門的すぎて「日本美術とはこういうもの」という全体像の把握には向いていません。そのため、作品を時代ごとに分けて、展示室全体で時代背景や文化も含めて見せていくことにしたのです。この時代別の展示が実現したのは、2001年の独立行政法人化の際に、大幅に組織を変更したことが大きいでしょう。

木下が言うように一般人に理解しやすいような展示として再び時代別展示が採用されるに至ったようで、構想自体も1950年代に考えられていた「館の半分を総合的時代展示とし半分を専門的テーマ展示とする構想」と何ら遜色のないものとなっている。また、木下が指摘しているように室管理体制から課ごとの分業体制となったことで旧来の部門展示（名品展示）を良しとしてきた独立志向型研究者の蛸壺化現象を押さえられ、連携体制が作り出されたことによるところが大きかったといえよう。

5. 東京国立博物館の抱える問題

（1）地方博物館への余波

しかし、今になって何故、時代別展示なのであろうか。良い言い方をすれば、これまでの紆余曲折の過程を経て、その取り組みがようやく結実したともいえる。ただ、その実際は館史の等閑による停滞ではないだろうか。今の博物館を取り巻く、危機的な状況になってようやく過去に要望の高かった遺物を掘り出し、実践しているように映ってならない。展示に関しては発展的な兆しは今まで何回もあった。

例えば京都帝室博物館では東京帝室博物館に先駆けて分野別展示から時代別展示に改められたが、結局は「時代別陳列品では、陳列品の構成が変わるたびに陳列装置の調整が必要になるのに対し、設備（陳列ケース等）に融通性を欠いていたこと、また陳列の上で様式の特徴をきちんと

とあらわそうとすると、各部の担当者の協同作業による綿密な計画が求められるが、その体制が充分でなかったことなど、陳列替の周期が短かった当時では、かなり困難があった⁽⁴⁷⁾ という理由から分野別の展示へと戻されている。

また、その後に森林太郎が東京帝室博物館で時代別展示を実施し、震災によって水の泡と化したのが、確実にその成果は館史として刻まれたことであろう。そして、後藤守一の一般人、専門家にも理解しやすい展示として導入した歴史展示などもその好例であろう。ただし、その後の復興博物館で黒板勝美の「一大東洋古美術博物館」構想が色濃く残ってしまったことは大いに考慮すべき点ではある。

しかし、戦後において開催され盛況だった「日本美術史総合展」は、どのように捉えれば良いのだろうか。先の京都帝室博物館の例、森の東京帝室博物館での実践例があったにも関わらず、「新形式の展示法」として時代別展示を取り上げている。これはあたかも明治大正期における博物館学がリセットされてしまったかの様な感がする程の大きな問題である。これより問題なのは、その後の1950年に行われた「陳列法の再検討」⁽⁴⁸⁾と題する座談会である。専門家でありながら「総合的にもつてゆく古いやり方より細かくわけてゆく新しいゆき方になる」や「大博物館の行き方としては分類陳列の仕方でない」といった意見には耳を疑ってしまう。いずれの問題も東京国立博物館のこれまでの館史を踏まえていれば分かることであり、まして考古展示における土器型式を一斉に細かく分類し並べたような展示と、当時代の特色を表現するために有機的に土器や人物模型を組み合わせた総合的な展示とではどちらがより良い展示かは一目瞭然のことである。また、「大博物館の行き方としては分類陳列の仕方でない」という意見は大量の優品を持ち、その優品自体が魅せるものであった場合、改めて組み合わせることの難しさや独立志向型の研究者同士を連携させ、展示を組み立てることへの難しさを物語っている。東京国立博物館ならではの尤もらしい意見に聞こえるが、その後の「館の半分を総合的時代展示とし半分を専門的テーマ展示とする構想」という一つの解決策があったにも関わらず、それを実施しなかったのは、旧体質の博物館人の怠慢であったといえよう。この画期的な取り組みが1950年代に実施されていたならば、どれだけ今日の我が国の博物館、博物館展示は良くなっていたのか、想像に難くない。実施しなかったことに対する余波は確実に残ったといえよう。

(2) 東京国立博物館は博物館か美術館か

従来からよく東京国立博物館は「博物館」か「美術館」か、という話題が博物館人の中で起こる。先の「陳列法の再検討」と題する座談会でも話題に挙がったのは良い例であろう。この問題は田中芳男の自然史博物館構想、町田久成の集古館構想、農商務省移管時の産業博物館構想、黒板勝美の東洋古美術館構想など幾重にも戦略的な意図や政治的な柵が張り巡らされた上に成立した東京国立博物館の宿命とも言うべき課題である。詳しくは述べないが、本来的には美術館とは、美術博物館を指すものであり、「博物館」か「美術博物館」か、とも言い換えられる。館の名称とは、その博物館の性格を自ずと指すものであり、例えば群馬県立自然史博物館の場合は「自然史」、神奈川県立歴史博物館の場合は「歴史」とその専門分野が明示されている。また一方で、博物館

関係法規には規定されていないが、秋田県立博物館や岩手県立博物館、福島県立博物館などの場合は、その専門分野が明示されていないものの、いずれもが歴史、自然史を含んだ総合博物館を暗に意味している。⁽⁴⁹⁾ 後発の国立と冠せられる博物館に関してみても、その専門分野が明示されているのである。また、東京国立博物館とほぼ時を同じくして設置された国立科学博物館に至っては、文部省博物館から東京博物館、教育博物館、東京教育博物館、東京科学博物館、国立科学博物館と幾度となく名称を変更するとともに専門分野も教育から自然科学へ、時代とともに推移しているのである。

それに反して、東京国立博物館はという一時期において帝室という一種の専門分野を明示したこともありはしたが、はっきりとした名称でその専門分野が示されたことはなかった。その結果として噴出したのが、先の議題である。博物館学を研究する者にとって、東京国立博物館史とは、当然知って然るべき基本博物館史であり、東京国立博物館の専門も自ずと理解していることであろう。しかし、一般人にとっては余程の博物館通でない限り、知る由もなく、東京国立博物館を一般的な「博物館」として認識し、一種の歪んだ「博物館像」を持ってしまうのは致し方ないことであろう。

この名称による弊害はこれに留まらず、博物館運営にも作用している。その弊害の表象こそが幾度となく実施される時代別展示なのである。時代別展示とは、その展示手法において歴史展示と美術展示の中間的な展示手法で、良くいえば両者を融合させた画期的な展示手法で、悪くいえばどっちつかずの展示手法とも表現できるものである。東京国立博物館において一度目に誕生した時代別展示は従来の「品目別分類陳列」から美術史を採り入れた画期的な展示手法であったと肯定出来るが、二回目の時代別展示は博物館の方針を美術に重点を置くか、歴史に重点を置くかといった博物館としての軸を決めかねたことにより成立した展示であったといえるのではなかろうか。博物館としての軸が定まらない限り、東京国立博物館が今後進むべき指針を打ち出せないことは言うまでもない。

対照的に、昨今誕生した九州国立博物館の展示は時代別、通史といった教科書的な流れに沿わず、解説の少ない美術展示でありながらもブロック毎にテーマやストーリーを組み立てているため歴史展示でもある。この九州国立博物館の取り組みは従来からあった東京国立博物館を中心とする旧国立博物館にとっても新しい指針を示したといえるのではなかろうか。

おわりに

本稿は東京国立博物館にて実施された時代別展示の歴史的変遷を辿り、またそこから見えてくる東京国立博物館の問題に言及した。先述した東京国立博物館を一般的な「博物館」と認識するというのは少し語弊があるかもしれないが、これはあくまでも首都圏域に住む市民の感覚であり、広汎な認識ではないことは言うまでもないことである。しかし、博物館界にとって今は氷河期にあたり、見直しの時期にきている。その見直しを実際にするのは、博物館関係者以外の行政の間人であることが多分にあり、その博物館認識というものの自体が大きく関与し、軽視出来ないもの

となっている。

また本稿は、あくまでも時代別展示という一展示手法の展示史からのアプローチであるため扱える範囲も狭く、ごく限られた事象のみの問題提起しか出来なかった。とはいえ、博物館人の誰しもが知っている分類し、時代別に並べるといった常套的な行為自体の根本を見つめ直す契機にもなったのではないだろうか。先述した東京国立博物館のリニューアルに伴い再登場した時代別展示は、展示学史を未だ持たない今を生きる我々にとってそれを「新しい展示手法」と言われてしまえばそうであるし、疑う余地もないのである。このことに関しては、筆者自身、非常に危機感を抱くとともに、博物館界に警鐘を鳴らしたいと考える。

博物館展示とは人間の経験の集積・知識からつくられるものであるから、現在の展示と過去の展示を結ぶ過程、つまり展示史、展示学史を纏めることは博物館学を「学」として為しえるためにはなくてはならないものではなかろうか。本稿は、伊藤寿朗が「展示法その他の個別的方法の発達はあったとしても、それを必然化し、現実化した契機が常に不明である」と指摘するところの歴史の空白を埋める作業の一つとして位置付けられるもので、今後は常設展示に用いる展示手法に留まらず、会期が定められた中で実施する特別展や企画展等にも言及していきたい。本稿が展示史、展示学史の体系化に向けた一助になれば幸いであり、大方の御批判と御指導を仰ぎたいと念願する。

註

- (1) 田良島哲 2009 「独立行政法人の中で所蔵コレクションの一元管理に取り組み始めた東京国立博物館」『学会ニュース』No. 87 p11 全日本博物館学会 2008 年度・第 3 回研究会 あらためて考える博物館の存在価値とコレクション 事例報告
- (2) 井上洋一 2010 「特別展を考える」『國學院大學 院友学芸員』p2
- (3) 伊藤寿朗 1978 「第二章 日本博物館発達史」『博物館概論』p200
- (4) 松浦淳子 1996 「森鷗外」『博物館学事典』p303
- (5) 椎名仙卓 2002 「帝室博物館総長としての森鷗外」『大正博物館秘話』p202-208 雄山閣
- (6) 本展覧会は巡回展として 2006 年 7 月 14 日～8 月 28 日（土）の間に島根県立石見美術館、2006 年 9 月 10 日（日）～10 月 22 日（日）和歌山県立近代美術館、2006 年 11 月 7 日～12 月 17 日（日）静岡県立美術館で開催されていたものである。
- (7) 村上敬 「鷗外とミュージアム 遊就館整理事業をめぐって」『森鷗外と美術』2006 pp. 280-287
- (8) 靖国神社 1983 「遊就館整理委員長森林太郎意見書 明治 42 年 2 月」『靖国神社百年史』資料編 中
- (9) 註 8 に同じ
- (10) 註 8 に同じ 森林太郎 「遊就館整理委員長森林太郎意見書 明治 42 年 2 月」 pp. 85-86
- (11) 註 8 に同じ 筆者不明 「遊就館拡張趣旨書」 pp. 86-87
- (12) 佐々木時雄 1975 『動物園の歴史—日本における動物園の成立』西田書店
- (13) 関秀夫 2005 『博物館誕生—町田久成と東京帝室博物館—』岩波新書
- (14) 東京国立博物館 1973 『東京博物館百年史』p243

-
- (15) 註 14 に同じ p66-69
- (16) 註 14 に同じ p255
- (17) 岡倉天心 2001『日本美術史』平凡社
- (18) 辻惟雄『日本美術史』1991 pp. 2-3
- (19) これを受けて九鬼もまた総長時代に『日本帝国美術略史』の編纂事業に取り掛かり、明治 32 年に仏文、明治 34 年に邦文として刊行している。
- (20) 岡倉天心 1888「博物館に就て」『日出新聞』九月二日、四日、五日、六日に連載 1979『岡倉天心全集』第 3 巻 平凡社 に所収
- (21) 註 20 に同じ p186
- (22) 松宮秀治 2001「岡倉天心と帝国博物館」『立命館経済学』第 50 巻第 5 号 pp. 122-123
- (23) 註 18 に同じ
- (24) 註 17 に同じ p12
- (25) 註 17 に同じ p9
- (26) 田原栄 1893「博物館の陳列法」『読売新聞』七月十五日、十六日 や S.H. 1893「帝国博物館」『早稲田文学』42 巻 などが挙げられる。
- (27) 鳥居が上京した時期はちょうど坪井が留学している最中のことであった。
- (28) 鳥居龍蔵「帝国博物館風俗古物歴史物品陳列方法に就て」『教育報知』第 355, 357, 360 号, 1893
- (29) 註 14 に同じ pp318-319
- (30) 黒板勝美 1906「古文書館設立の必要」『虚心文集』所収
- (31) 京都国立博物館『京都国立博物館百年史』p153
- (32) 註 31 に同じ p151
- (33) 註 31 に同じ p151
- (34) 高島米峯 1918「新任博物館総長 森林太郎博士に與へて博物館の革新を促す」『中央公論』第 33 2 月号 pp. 35
「某博物館員は、「一体、この森林太郎といふ人は、今まで何をして居た人だらう。エッ、小説家？、軍医総監？へー、そんな人が、博物館へ来たつて仕方があるまい」と、驚異の眼を輝かしつつ、冷笑し去りたりといふ。」
- (35) 註 7 に同じ p8
- (36) 森林太郎 1889『審美新説』『岩波全集 21』に所収
- (37) 森林太郎 1899『審美綱領』『岩波全集 21』に所収
- (38) 森林太郎「933（大正七年）六月二十五日 市内小石川水道町五十五 賀古鶴所宛 帝室博物館より」『鳴外全集 著作編』第 33 巻 pp. 499
- (39) 註 38 に同じ 森林太郎「（大正七年）七月十一日 賀古鶴所宛」pp. 500-501
- (40) 後藤守一 1931『欧米博物館の施設』帝室博物館
- (41) 後藤守一 1933「帝室博物館歴史部の陳列」『博物館研究』第 6 巻 Vol. 7 pp. 1-2
- (42) 金子淳 2003「報告Ⅱ 歴史展示の政治性－「歴博」の前身・国史館計画の事例をもとに」『歴史展示とは何か』p64,

-
- (43) 東京国立博物館 1948 「日本美術史総合展 観覧者の声を聴く」『国立博物館ニュース』第9号
- (44) 東京国立博物館 1950 「陳列方法の再検討(座談会)博物館の陳列はどうすればよいか 関係者の批判と今後の対策」『国立博物館ニュース』第33号
- (45) 註14に同じ「国立への移管と国立博物館」p600-601
- (46) 木下史青 2007 「展示デザインが引き出す日本美術の魅力」『ミュージアムレポート』
- (47) 註31に同じ
- (48) 註44に同じ
- (49) 山梨県立博物館や和歌山県立博物館、岡山県立博物館など一部の博物館においては歴史博物館の場合もある。

引用参考文献

帝室博物館 1938 『東京帝室博物館 復興開館陳列案内』

河野一隆 2006 「美術展示が紡ぎ出す歴史展示—九州国立博物館が目指したもの—」『考古学研究』第53巻第1号 pp. 7-10

東京国立博物館 2009 『東京国立博物館の歴史 皇室と東京帝室博物館』

東京国立博物館 「展示構成」(2009年8月検索)

http://www.tnm.go.jp/jp/servlet/Con?pageId=A01&processId=02&event_id=758